

AI（人工知能）を包含する Embedded Knowledge（埋め込み知）と言う視点

（投稿）第 17 回 知識を見る二つの視点～知識は個人に宿るのか、それとも組織や社会に宿るのか～（本学会前理事 山崎秀夫）

新しい産業革命をもたらすDX（デジタルトランスフォーメーション）が次期 KM 学会の大会テーマに浮上する中、無線通信の 5G の開始、データ駆動型社会と呼ばれるスマートシティへの都市の移行、ホラクラシーやテイル組織などの新しい組織論の台頭、デジタル技術が支えるスタートアップ企業が多数登場、地球環境問題への注目とステークホルダー資本主義の提唱など多くの変化が起こっています。その為、イノベーションの課題は単なる商品やサービスの開発だけではなく、組織やビジネスモデル、業界の在り方まで幅広くカバーする必要があります。2015 年後半の NHK の朝ドラで放映された「あさが来た」は今世紀最高の視聴率 23.5% を獲得しました。その中では明治維新期の産業の変化が見事に描かれ、金融業界は「両替商から銀行へ」と大きく形を変えていきます。例えば住み込みの使用人は、月給をもらう社員となり、外から通ってくるようになりました。現在、第四次産業革命と呼ばれる変化では、明治期の「両替商が銀行に形を変えた」ような変化が起こると予測されています。そのような変化が 5 年から 10 年程度の短期の間にも起こるかもしれません。

そうなれば両替商に携わっていた経営者は「古い両替商の知識を学習棄却」し「新しい銀行の知識を獲得し組織の中に定着させる」必要があります。

従来の KM ではこのような変化も含め組織内で必要な知識を「暗黙知と形式知」の二つの視点（個人に焦点を当てた知識の視点）のみで理解してきました。しかし「あさが来た」のドラマで描かれているような商品やサービスだけではなく、組織やビジネスプロセス、業界の構造、文化などが大きく変化する時代には、それだけでは不十分だという共通認識（相互主観）が KMGN（KM の国際連合組織）などで普及し始めています。その結果、組織の構造や在り方を論じるピーターセンゲの知識論「学習する組織論」が再度注目されています。同時に知識社会学の研究が延々と続けてきた「埋め込み知(EMBEDEED KNOWLEDGE)」が再度、注目を集めています。

さて少し知識論の基本について述べてみたいと思います。以前、このコラムで紹介した書籍「ソーシャル物理学（アレックス・サンディ・ペントランド）」の中で、知識への二つの基本的なアプローチが述べられています。

- 1、知識は個人に付随するなど個人中心アプローチで考えるべきと言う見方
- 2、知識は社会や構造、組織、文化、サービスや製品に埋め込まれているという見方
（これは埋め込み知（EMBEDDED KNOWLEDGE）の立場）

有名な野中理論は知識論としては1の「个人中心アプローチ」をとっています。マイケル・ポランニーなども1の立場です。一方2の立場をとる研究者も多数います。歴史的に有名なカール・マルクスの社会研究、構造主義で知られるクロード・レヴィ・ストロース、ポスト構造主義で有名なミッシェル・フーコーなどは2の立場の研究者と言えましょう。

マルクスは「労働者階級は革命的である。そうでなければ無価値である」と述べ「社会の階級の中に共産主義革命への衝動（意思決定、行動の方向性に影響を与える知識）が眠っている」と述べました。ミッシェル・フーコーの場合には「刑務所の塔であるパノプティコン」を取り上げ、囚人と言う存在と塔の関係を埋め込み知の視点から述べています。塔と言う物理的なものと囚人と言う関係性の中に「見張られている自分は囚人なんだ」と言う自問自答の抑制的な行動を促す知識が眠っているというわけです。同じことは「社員の身に着けるバッジや制服と社員の関係」にも当てはまります。制服を着るたびに、バッジをつけるたびに、またライバル会社の社員のバッジを見るたびに会社を意識しはっとするというわけですね。

ソサイエティ 5.0 と呼ばれる新しい産業革命の到来を前にして、一度、知識論の棚卸を試みることをお勧めします。